

リゾート地の子どもたち

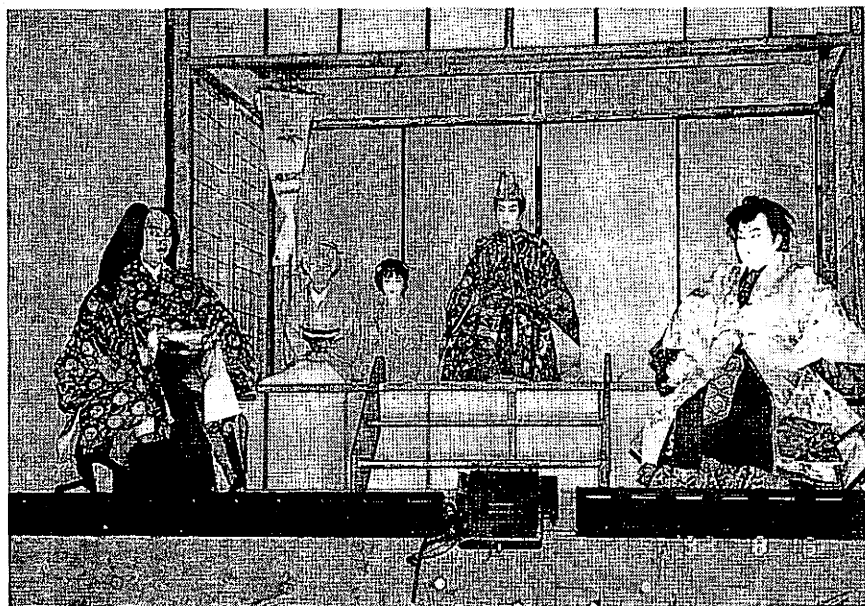
— 湯沢町と塩沢町石打丸山 —

同じような日本有数のスキースキーリゾート地をかかえて隣接する湯沢町と塩沢町石打区。しかしその両地域の観光への施策は大きく異なり、その差が子どもたちの育てられ方の差ともなっているという意味で、興味深い地域です。

毎年八月十六日の夜、石打の関山神社の境内は地区総出の歌舞伎見物の人々で賑わいます。そこには地区が建てた常設の歌舞伎舞台（回り舞台も設置されている）があり、大人の歌舞伎と共に、子ども歌舞伎も上演されるのです。地区の子どもたちは三年生になることを心待ちにし、その時がくると歌舞伎に出

るか、祭りの踊り屋台の踊り手になるか（その踊りはおぶきの前座としても披露される）のどちらかを希望し、歌舞伎役者も踊り手も歌舞伎保存会や民謡会の大人たちからの連夜の指導を約二か月にわたって受けることになります。

今年は歌舞伎への出演希望者が多く、一演目では収まりきれないので二演目とし、「絵本大功記十段目尼ヶ崎の段」と「奥州安達ヶ原三段目袖萩祭文の場」の二幕が上演されました。もう一演目増やすとなれば衣装代その他で大幅な予算増になるはずですが、だからといって子どもたちの希望を切るということはありません。それが石打区の行政の姿勢です。この姿勢はジュニアスキークラブの対応にも現れています。区行政の一部門として位置付けられているジュニアスキークラブは優秀なスキー選手を育てたいという目的もあるのですが、スキー観光地として地区の住民全てに一定のスキー技術を身に付けさせたいとして、三年生以上の希望者の全てを受け入れています。コーチには地区の民宿を経営する父親たちがボランティアとして当たっているのです。



一定のレベルにまで達していない子どもには、みんなと一緒に滑れるようになるまでは個人指導もしてくれるということもあって、このスキークラブへの住民の信頼は厚いのです。

この歌舞伎やスキークラブに見られるように、地域の大人全体で地区の子どもの面倒を見るところという体制が行政の仕組みとしてできているのがこの石打区です。地区内の道路を花で飾る作業や山菜や茸を採る行事を老人と子どもたちの交流の場として設定したり、同じスキー観光地であるオーストリアのセルデン町やニュージーランドのメスベン地区などと姉妹都市関係を結び、そこへ地区の中・高校生を派遣することを十数年にわたって継続するなどという事業も区の行政として行っています。

なぜこのようなことが可能なのでしょう。石打区は塩沢町の中の一行政区（人口二〇〇人、三〇〇世帯）、いわゆる町内会です。

しかしこの区は、観光協会長も兼ねる地区区長を住民の全員投票による公選制で選び、各隣組から選出される代議員で構成される区議会や、区の行政と観光協会の事業を執行す

る独自の事務所（専従職員五人）などの住民自治の仕組みをしっかりと持っていることが特徴です。

この自治組織は、スキー場の管理運営権を持ち、地域住民の営業と競合する分野への外からの参入を規制し、民宿を経営する住民の過当競争と過大投資を抑さえ、その調整をはかるという役割を果たしています。また、シーズンオフの稲作農業とスキーシーズンの民宿経営とともに地場産業と位置付けて、夏場は農業に専念し、自分で作った米で冬のスキー客を迎えるという経営形態をかたくなに守っています。

その結果、この地域の町並みは、一シーズン百万人に迫ろうというスキー客の入り込みにもかかわらず、この二十年の間さして変わらず、素朴な農村の気配を色濃く残したままです。集落の周囲の田は黄金の稲穂がおもく垂れ、減反で荒れた田は一枚も見られませんが、（この地区の減反拒否の結果、塩沢町の他地域がその分をかぶることになるという別の問題も生じてはいますが……）

一方、隣の湯沢町（土樽地区）はどうでし

ようか。

バブル経済が崩壊して狂乱はストップしたとはいえ、それまでのわずか五年の間に雨後の筍のごとく建ったリゾートマンションは湯沢町全体で計五十九棟・一万五千戸にも達し、特に土樽地区はその景観を一変させました。人口九千五百弱・約三百世帯の小さな町であるから、全世帯の五倍ほどのマンションができてしまったことになります。うち三千戸ほどは売れ残ったままできるといわれますが、スキーシーズンの週末は車の往来もままならぬほどごった返すマンション街は、シーズンオフともなれば、明かりのほとんどもらない巨大な墓のようなビルが暗闇に林立する地区となります。

マンションブームで土地価格狂乱の時期、それまで堅実な農業とスキー民宿で暮らしてきたこの地区の住民は、開発業者の札束攻勢でその生活感覚を狂わせられていきます。民宿経営のKさんはその当時を回想して次のように語っています。「なにしろお金第一主義でした。今までゼロだと思っていた雑地までお金になることが分かって、どの業者に売った



ら得かとか、隣はいくらで売ったのかなどの疑心暗鬼に踊らされて、子どもを見ている余裕などはなかったですね。トランク一杯のキヤッシュで人間の素朴さも売ってしまったと言ってもいいのでしょうか。真面目に働く、真面目に生きるという姿勢を無くしていた時期でした」

本来は苦勞して手に入れるべきものでもすぐさま手にできることに慣れてしまった子どもたちは、努力を要求される学校との間の落差に耐えられず、それを様々な問題行動として表現します。親たちの連帯意識も希薄になり、互いに非難はしあっても共同して子どもの問題に対処することが困難になってきます。当時の学校の教師たちの苦悩は深く重いものがありました。

土地狂乱が去った今も、後遺症は癒えきってはいません。中子集落。マンションの最も集中するこの地区では、共同体としての紐帯を再び回復したいとして祭りの復活を試みしました。地区の中堅の民宿経営者が様々なアイデアを出し合って四年間がんばりましたが、やはり定着するまでには至らず、今では祭り

は絶えています。

中里地区。集落の神社の子ども祭り囃子の練習に日当五百円、祭り当日には三千円を支給していますが、それでも子どもがなかなか集まらずに苦勞しているといえます。いったん崩れた共同体意識の再生はなかなか困難です。

湯沢町と石打地区、この両者の差異は何だったのでしょうか。

湯沢町は、上越新幹線と関越自動車道で東京から二時間以内という条件に目をつけた大資本のリゾートマンションにあっていうまに席巻されてしまいました。マンション業者に高値で土地を売った民宿経営者は、自前のグラウンド・体育館・プール・テニスコートなどを作って経営を拡大し、土地を売れなかった民宿との格差を一挙に広げてしまいました。その結果、集落の共同体としての機能は損なわれ、地域の教育力は衰えていきました。

子どものためにも、このままではいけないと気付いた住民の改革への模索は始まったとはいえ、町としての対策を立てるまもなく流入してきた中央資本の荒波の残した傷跡は大

きく、確かな手応えを見つけるまでにはいたっていないと言えます。

一方石打は、幸いなことに、このような隣町湯沢の激変を見ながら、湯沢の次のリゾート地として襲ってくるだろう中央資本への対策を事前に立てるだけの余裕がありました。マンションの侵入を完全に拒否はできなかったとはいえ、それに様々な規制を加えることを工夫し（地域住民に開放する空間の設置・売り逃げの禁止など）、地域の営業と競合する資本の流入を阻止するという行政への確信をますます深めていきました。そして「これ以上石打・丸山に來るスキー客は増える必要はない」とまで言い切る観光協会長（区長）のもと、生産手段としての土地を手放さず、環境保全と地区住民親睦のための施策を重点的に行っています。

その両者の差が、子どもをとりまく大人たちの目の温かさの違いにもなっているとも言えるようです。

石打の子どもたちにも脆さはあり、問題行動で親や教師を悩ますことについて、湯沢の子どもたちとの間に大きな差があるとまでは

言い切れません。しかし彼等が大人になって郷里を思うとき、その温度差は当然あるだろうとは予想できることです。

九六年四月、石打区では四年に一度の区長選挙が行われました。上記の施策を二十年に亘って実施してきた区長は引退し、不況の中心スキー客減少に歯止めをかけるべく観光行政の転換を標榜する新しい区長が無投票で当選しました。子どもと老人に対する施策に当面は変更は無いものと思われませんが、外部資本の導入という方向に変わっていくことも予想され、石打がどのように変貌して行くか、注目していかなければなりません。

（佐藤守正）

